

櫻色に四方の山風そめてける衣の關のはるの明ぼの

宮城野 秋萩の下ばの露に色付てうづらなくなり宮城野の原

阿武隈川 白川と云所よりねだと云所へこゆる間に此川あり江戸より出羽の山がた奥州二

本松、米澤など行海道也、高階經重朝臣のうたに、

行末にあふくま川のなかりせばいかにかせましけふのわかれを

玉川 野田の玉川ともいふ也、新古上冬のうたに、能因法師、

夕されば汐かせ越て陸奥の野田の玉川千鳥なくなり

緒絶橋 ヲダヘノハシ とだへの橋とも、丸木橋ともいふ、

壺石文 ツボイシノシ 卒都濱 ソツト 十符菅薦 トフクサガサ

陸奥のいはで玄のふはえぞ玄らぬ書つくしてよつぼの石ぶみ

陸奥の十符のすがごも七ふには君をねさせてみふに我ねん

請ひがは遠からめや、陸奥の心づくしのつぼのいしぶみ

松島 小島 松がうら島ともいふ、千載冬のうたに、

波間より見へし氣色ぞ替ぬる雪降にたり松がうら島、新後撰冬のうたに、俊成朝臣、

松島やをじまの磯による波の月の氷に水鳥なくなり

鹽竈浦 ちかの鹽がまとも、ちかのうらとも云、鹽竈明神の社あり、草創縁記神社の所にくはし、

古今大歌所の御歌、

陸奥はいづくのあれど玄ほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも

笹島 マカシマ いさり舟笹が島のかゞり火に色みへまがふとこなつのはな

阿古屋、松 おもひきやこよひの月を陸奥の阿古屋の松の影にみんとは